

佐賀怪猫伝の源流

高 橋 昌 彦

佐賀藩の化け猫騒動は、江戸時代から近代へと移り行く中で、内容を変化させ、実録や演劇で広く扱われた題材である。そして、これまでの先行研究は、話がどのような広がりを見せ、変わっていったかの方に重点が置かれていたといえる。早川由美氏^(注1)は、

本稿では、数々の猫又話の中の「鍋島猫騒動」の特色を明らかにし、広く流布した理由について考察する。そして、演劇としての『花嵯峨猫魔稿』と、それが基づいた鍋島猫騒動の実録・講談との関係を比較し、「鍋島猫騒動」という事件がどのように物語化や劇化されていったのかを確認していくこととしたい。

と、演劇との関連から述べており、また、高野信治氏^(注2)は、

問題の立て方としては、鍋島家の御家騒動がそもそもいかなる性格のもので、それがどのように物語化（ここでは、伝承やそれと関連する講談・実録・歌舞伎などの広義の口承も含めた文芸化と考える）されたのか、またその過程でなぜ猫化という怪異性をともなうものになったかという、いくつかの段階が想定されよう。

と、御家騒動話の創作と成長を段階を追って見ていこうとしている。対して、筆者の興味は、この実録が作られた初期の古い形にあり、

本稿では源流へ上っていく姿勢で作品を考えていきたい。

一

『佐賀怪猫伝』とは、実録の一つであり、近世実録全書に所収されて広く知れ渡った書名であるが、原本の所在は不明のままである。但し、同じ内容の実録は『旧猫伝』等の別の書名で残っている。まずは、その解説を引いておく。^(注3)

『佐賀怪猫伝』は、所謂鍋島の猫騒動である。講談に於ける「佐賀の夜桜」と殆ど同一物であるが、その首と尾とに多少の相違がある。講談の方では、鍋島氏がその主筋に当る龍造寺家を滅亡せしめたに就いて同家の後室がこれを恨み、平常愛してゐた玉といふ鳥猫に怨念を伝へると、猫は小森半左衛門の母やお部屋お豊の方等を喰殺し、而もお豊の方に化身してお家に祟りをなし、石田大隅をも引入れお家顛覆まで企てたが、事成らずして宝満山楠の岩窟に潜んだのを退治せられるといふのである。然るに本篇にあつては、龍造寺家の滅亡一件には毫も関係なく、鍋島の藩士小森半太夫が親の遺愛たる異国種の牡猫を愛せず食

餌をも怠り勝にしたために、先づ主人の小森を恨み、次に、追打たれなどした家中の人々を恨み、終には泉水の鯉を取つて迫害された事から殿の愛妾お政の方を喰殺して化身し、若殿の御身をも危ふくするに至る。而して前者が豊満山に於て退治されるのに、これはお政の方の住居する松の御殿に於て討取られることになつてゐる。(点線波線執筆者)

点線と波線で示したように、同じ化猫騒動でありながら、大きくは龍造寺家の恨みが絡むかどうかで二つの系統が存在していたとする。分類については、前掲の論文中で早川氏も、A系統(龍造寺が出ない)・B系統(龍造寺が出る)と分けており、高野氏はこの二つに加えて「化猫ではなく馬に乗った白装束の竜造寺高房の亡霊(御霊)がでる物語」と佐賀に残る別な説話の影響を考え、三つに分けている。どちらが古い話型なのかを知るためにも、まずはこの化猫騒動話の初期の形を検証する必要がある。

これまで、初期の作品として取り上げられてきたのは『肥前佐賀二尾実記』(以下「二尾」と略す)の後半部に載る話である。この作品に着目した土井順一氏は、「二尾」の成立について「本話はおそらく、近世中期末から後期にかけ成立し、作者は不明ながら、江戸の実録作家によつて書かれたものである」とし、さらに随筆「翁草」にある「鍋島屋敷奇異の事(寛政期の記述)」との共通点を指摘した。^(注5) 土井氏の指摘と重複するが、その対応関係を改めて確認すると以下の通りになる(傍線波線執筆者、以下同じ)。

肥前佐賀の屋敷は、山下御門の内正面に有り、屋敷の鬼門隅の長屋にて、昔より今に至り、一日も無怠憎衆来て、日護摩を焚

く、其所以は、昔大奇怪有し故なりと。今も折々怪異有り、是太守在府の中計なり、帰国あれば怪異有事なし、故に屋敷中の男女、太守の帰国を悦て、右済は安眠す。毎夜の事には非ず、小雨など降て、物淋しき時は必有り、或は庭中に火柱立、或は器動き踊り、又は家鳴などす。此火柱を見る人の語りしは、大さ二廻許長三間程に立つ、あはやとおもふ内に、忽消失、又それよりも増りて、四五間も立登る、元来怪物なれば、自ら身の毛立て凄かりしと云り。又屋敷中、夜中雨戸を鎖事なし、いか成る柩をしても、自らひとり開なり。又太守登城御仏参等、出門の事表門よりと有れば裏門より出らる、裏門と令る時は、いつにても表門なり。是等も右怪異に寄事と見えたり。其外種々異説有れども、実否をしらず、凡此異事は江戸中に知らぬ人もなきとなり。

『翁草』 卷百六十一^(注6)

：扱其後、殿様江戸表へ御きふ(帰府)の節、御屋鋪の内に猫堂とて常念仏の御堂を建させられ、念仏怠なく奥方女中の追善をなし給ふ。今にいたる迄此事たいてん(退転)なしとかや。是全猫堂の因縁なり。いまでもつて御国人の節はあやしき事はあるよし。よつて表門より御出とふれては君には裏門よりひそかに御出ありとぞ。…

(「二尾」 末尾)^(注7)

佐賀藩江戸藩邸内で日々念仏(護摩焚き)がなされていることが傍線部、藩主が屋敷を出る際のお触れと実際の行動についてが波線部

になる。波線部については確かに同じ内容と言えよう。だが、傍線部については、猫堂という名称や念仏（護摩焚き）の目的などはつきりしないところも残る。何より『翁草』は、怪異が猫によるものとは一言も記していない。『翁草』に載るのは、昔何か大奇怪があり、藩主在府中のみ様々な怪異が起こる。怪異に対する対処法の一つが屋敷を出る時のお触れとその反対の行動というのである。『翁草』の波線部と同じ話が、『二尾』に使われたことはその通りである。だが、そのまま傍線部まで化猫騒動に繋げるのには無理がありそうである。そこで、まずは長編化する前の初期の形の諸本について見てみることにする。

二

化猫騒動話の初期形の本については、早川氏も服部仁氏所蔵本を紹介し、菊池庸介氏も「鍋島猫騒動」諸本の中で紹介されている。管見に入つたものを以下に列挙してみる。

①純真学園図書館蔵本

外題「肥州」奇怪猫堂物語、目録題「奇怪猫堂物語」写一冊
大本 目録1丁、本文27丁。一面12行。巻末識語「文政八年酉仲秋吉辰写之」。共紙表紙・紙縫り綴、後ろ表紙に貸本屋らしき黒印の一部（不鮮明）が残る。

②九州大学記録資料館宇土細川文書蔵本

外題「佐嘉鍋嶋怪猫実記」、目録題「奇怪猫堂物語実記」、尾題「奇怪猫堂物語」写一冊 半紙本 目録半丁、本文41、5丁。一面9行。巻末識語「天保三年辰年二月写之 佐嘉 山斧久右衛門」

③架蔵本

外題「鍋嶋屋鋪／猫堂由来」奇怪物語、内題「奇怪物語」写一冊 半紙本 序1丁、目録2丁、本文50、5丁。一面8行。巻末識語「于時天保八丁酉年水無月 北大谷村吉川氏写之」

④佐賀県立図書館蔵本

外題「肥州」奇怪猫堂物語」写一冊 大本 目録1丁、本文30丁。一面10行。巻末識語「弘化三年丙午吉辰 富永徳助写之」※佐賀県立図書館データベース

⑤東京大学総合図書館南葵文庫蔵本

外題「猫堂建立始原」、内題「鍋嶋屋鋪／猫堂因縁」奇怪物語」写一冊 序・目録1丁、本文27丁。一面10行。※東京大学学術資産等アーカイブズポータル

⑥大洲市立図書館矢野玄道文庫蔵本

外題「鍋嶋屋鋪／猫堂因縁 奇怪物語」写一冊 半紙本 序・目録1丁、本文29、5丁。一面8行。巻末識語「下谷山伏町 星野」。虫損大。※国書データベース

⑦鍋島奉效会蔵本（佐賀県立図書館寄託）

外題「肥前佐賀二尾実記」写二十四卷八冊存（前半は別話、後半の巻24、30が化猫騒動）半紙本 本文60丁（化猫騒動の分）。一面8行。※翻刻は『佐賀県近世史料』第九編第一巻所収。『江戸の怪談を読む』猫の怪（白澤社・二〇一七年）に早川由美氏の注・現代語訳が載る。

以下未見本

⑧関西大学中村幸彦文庫

「猫堂奇譚」写一冊（菊池氏『近世実録の研究』に紹介）

⑨服部仁氏所蔵本

「鍋嶋屋鋪猫堂因縁奇怪物語」 写一冊 半紙本（早川氏論文に紹介）

年記のわかる中で古いものは①本になる。但し、この本自体が別の本を写したものでなく、漢字を曖昧に写した箇所が散見できる。したがって、文政八年より更に遡れることは間違いない。書名は、ほとんどが「猫堂」の由来・因縁を示すもので、⑦本「二尾」だけが二つの作品から成るとは言え、異なっている。つまり、話の中核は堂が建てられた縁起ということになる。また⑦本は、作中「享保二年」の設定になっているが、他本に年時設定はない。同じく、主要な登場人物「用人森半右衛門」は、他本では「森半左衛門」になっている。因みに、『安永森鏡邪正録』（安永四年序）に森蘭丸の子孫で旗本森半右衛門が出てくるが、単なる偶然か、何か関係があるかは不明である。⑦本を詳しく見ると、巻24・28と巻29・30は別筆で書写されており、巻29の巻末は「此上は奥へ」と中途で文章が終わっている。これについては、『佐賀県近世史料』の校訂も翻字の中で「コノ面ニ余白一字分モ無シ、以下、小見出シニ見合ウ内容ノ丁ヲ欠ク」と書き入れている。また分量については、やはり⑦本は他より増えている。主要登場人物の一人明王院に関わる記述や猫渡来の歴史などの記述が加わっているほか、朱の書人なども見える。また③⑤⑥本のように、序文が加えられているものがあるが、年次はなく、後人が作品を読み、内容の大略をまとめたものかと考えられる。つまり、化猫騒動初期形の諸本中において、⑦「二尾」は内容的に決して良いテキストとは言えないということになる。では、改めて①本で梗概をまとめてみる。

鍋嶋江戸屋敷の用人森半左衛門は、総身真つ黒で目は赤く、尾の割れた猫を十年余り寵愛していたが、突然その猫が行方不明になる。翌年春、藩主が詩歌の会を催し、和歌を案じていると、突然猫が藩主を襲うが、逆に眉間を切られ、屋敷から逃げていく。血の跡を追っていくと森家の裏口に続いていた。家中を探すと、床下から人骨が見つかる。頭痛で寝ていた老母が事件に口を出してくるが、正体を見破られ、行方をくらます。その後猫が老母を食い殺し、化けていたと判明する。江戸藩邸から使者小崎重右衛門に取り憑いて佐賀に赴いた猫は、城内で御部屋様（側室）を食い殺し、その姿に化ける。帰国した藩主は夜な夜な苦しめられ、衰弱していく。家臣達は宿直を勤めて原因を探すが、真夜中になると寝入り、目的を果たせない。祈願所の明王院によって見出された足輕伊藤惣太と殿の信頼が厚い大沢蔵（倉）之進が協力し眠気を克服、御部屋様の正体を見破り、猫を退治する。その後、大沢・伊藤は加増出世し、猫によって殺された人々の供養として猫堂が建立された。

一読、不明な点も見えよう。この猫の素性は何か、なぜ突然殿様を襲ったか、どんな能力があるのか等々、全く説明なしに展開していく。そこに、物語が膨らんでいく素地があったといえるだろう。諸本を少しく比較してみる。まずは、本文冒頭は②本以外はほぼ同じ書き出しとなる。①本を例に引いてみる。

今はむかしと言へとも古き言葉に聞ゆれとも、まさしく御当家に至りて、鍋嶋御屋敷江都表御上屋敷の表門に、常念仏たからかに香をたぎ鉦をならして、さも殊勝にきこゆる事、武家の御屋敷の表にはふしぎなる事なり。いづれも江都に鍋嶋御屋敷念仏さんまひの事を、あやしむ事今以相かわらす、其訳を委敷

聞に、誠に古今珍事なり。(句読点は執筆者、以下同じ)

一方、②本冒頭には「貴人公家と言とも愛にはこれは、必らず身の災ひとなる事まゝあり。」の一文が入り、以下右の「今はむかし…」が続く形になっている。続いて、末尾を見ると諸本ともほぼ同じ内容となっている。①本は、

扨又江戸表御屋敷の表猫堂とて、常念仏をとなへ、死せし女中の追善をなし給ふ。是猫堂の因縁なり。今に江戸御屋敷御国入の節、あやしき事有に依て、表門より御出と触て実は裏御門よりひそかに御出、裏門より御出と触て表御門より御出あるとぞ。さて此節殿の御運つよく、明王院の行力、藏之進惣太が忠義、天も感応まし／＼て猶も国中安穩に栄ゆる武門を有かたけれ。

と、冒頭の常念仏に照応するように、この事件で亡くなった女性たち(側室やその侍女たち)の追善として御堂(猫堂)が建てられたことと藩の武門を称える形で結ばれている。また、序文を見ると、

③⑤⑥本ともほぼ同じ文章である。③本から引く。

世の中に奇あり、怪あり。奇はかたるべくして怪力乱神は語るべからずと、聖人のおしへなれば、眼のあたり鍋島の御家かたに猫堂あり。其由来を聞しに、誠に御運の目出度ところ、家臣の忠誠感して余り有に依て、筆を染まなまし。

奇談怪談には、馴染み深い『論語』の一節を引きながら、猫堂の由来を知ることで鍋島家の武門を称揚するものとしている。早川氏は「御家騒動の怪猫」(『江戸の怪談を読む』猫の怪「所収」)の中で、

…わけもわからず、一方的に襲われ恨まれた鍋島家としてはいかにともしがたい。そのため、猫堂を建立して祀るなど、その霊異を鎮めることになったのであろう。…鍋島屋舗の猫堂と不

思議については、神沢杜口の『翁草』にも語られているので、巷説として広く知られた物語であつた。その由来を説く物語を基本として、「なぜ」そんなことが起きたのかを語ることで、実録や講談は成長していったのである。

と、猫堂建立を「霊異を鎮める」ためとし、『翁草』の話をそのまま利用したとしている。少なくとも猫堂建立は追善である。一方で高野氏は前出論文中、鍋島家の怪異と化猫の話をつなげることに慎重な立場を取りつつ、

…つまり何らかの怪異現象が日護摩祈祷実施の背景と神沢は証言する。事実、鍋島氏が、江戸桜田屋敷に護摩堂を建て祈祷・祭祀を行っていたことは同時代史料でも確認できる(『江戸私史』宝永五年(一七〇八)三月十三日、十一月十日各条など)。

…おそらく近世後期の成立と考えられる「肥前二尾実記」は、「翁草」と同様の伝承・伝聞の上に成り立っていることは確実だろう。怪異を起こすものは何か、鍋島氏は何から身を隠さなければならなかったのか。それが同じく近世後期成立の(a)タイプの伝承(竜造寺氏の怨念)とつながるのか判然としないが、亡霊や二尾の猫の怪異が鍋島氏やその関係者を襲う主題は同じであり、「翁草」の現実の怪異・伝聞にも重なることは想像できる。つまり、「肥前二尾実記」の作者は「翁草」に語られるような江戸屋敷での怪異伝聞を、近世後期に流行の萌しをみせていた化猫・猫股話に仕立て、二尾の猫が鍋島氏を襲う筋立てを創作したのであろう。

とその創作態度を述べている。『翁草』の一部と同じ話が使われていることは、先にも確認したが、果たして一部が同じだからと言って、

そこから怪異と念仏祈祷の関係、更には化猫騒動とをどこまで結びつけてよいだろうか。例えば、上原虎重氏は、早くに長篇化した化猫騒動を扱って、佐賀藩の歴史を新井白石「藩翰譜」から、佐賀藩の怪異を『翁草』から、猫が母親を殺し化けていたことを『兎園小説』第十一集中「高須射猫」からと、断言を避けながらも複数の材料を配合したのではと述べている。^{注10}「高須射猫」は、屋代弘賢が文政八年十月に「去年（甲子）」の話として、鳥居丹波守の家令高須源兵衛家の出来事を語ったものである。文政七年の話ならば干支は甲申になり、「去る年」として、干支を信じれば文化元年をさすことになるだろう。いつの話なのかわからず、この話の末に付された評には「右の物語りかた（いぶかし」とある。素材と断定できるかどうか疑問の残るところではあるが、佐賀鍋島家周辺の逸話に拘泥せず、材料を求める態度は必要と考える。

三

そこで、化猫騒動話と御堂建立に焦点をあてた話はないのかというところに立ち戻ってみたい。すると、高山彦九郎「江戸旅中日記」天明元年五月十八日の条に、

…中島家より東の方に長井九郎右衛門殿といへる旗本あり、三代以前の祖を主膳正といふ母に事へて孝也、猫股其母を喰ひてかの母公に化けて我ま、をして食を貪る、ある時こしもとに遣はれたる女かの猫また婆々のむこく遣ふに堪へずして逃く、尋ね返してかの女を殺さんとす、主膳正わけを尽して命を乞とも許さず、遂に主膳殿にさらしめたり、後に婆々死したりけるに

怪しき聞へあり、かの女か為に堂を建て今に祀るといふ、長井家の前に對して今御普請奉行を勤らるゝ、丸毛和泉守殿にてハ時の拍子木を打に四ツのみ時の如く打てり、其余の時に数のことくすれハ何もの共しらす奪ひ取といふ、狐狸の類なるへしといふ、怪説なれとも逗留中聞まゝ、に爰に記す、

と言う聞き書が残ることに気付く。「怪説」とするが、記事の裏付けをとってみる。⑦「中島家」は表四番町の旗本中島三左衛門（八百石・西丸御小納戸）で、この屋敷に彦九郎は世話になっていた。この話は、中島家の家臣奥村安所が語った内容になる。④「主膳正」とは、姓の表記は異なるが、永井武氏（八十郎・九右衛門・主膳正・従五位下、「寛政重修諸家譜」卷第六百二十五）をさす。清水家の家老で五百石、表六番町に屋敷があった。記事中「東の方」という方は角はやや異なり、南方になる。明和八年（一七七二）没、享年七十九。武氏の養子である武進・武信は有徳院（八代將軍吉宗）にお目見えを果たすが、共に武氏より早く亡くなったため、孫の氏恵（うじよし、母が武氏の女）が遺跡を継いだ。氏恵は天明二年（一七八二）六月十日没、享年四十二。⑤「丸毛和泉守」は、丸毛政良（まるもまさかた）のこと（『寛政重修諸家譜』卷第百九十八）。九百石で安永九年十月二十日御普請奉行、同年十二月十八日従五位下和泉守叙任。天明二年十一月二十五日京都町奉行に転出するので、この時期は御普請奉行であった。このようにわかる範囲で、高山の記録は全くの出鱈目とも思われない。波線を付した箇所を見ると、猫股が老母を殺し化けていたこと。屋敷の腰元がこの老母の指示で殺され、この女の供養のために御堂が建てられたことがわかる。この筋は、これまで見てきた化猫騒動で殺された人のために御堂を建てる

という猫堂の由来にそのままつながるだろう。因みに、この永井主膳正については、他にも怪説が残る。根岸鎮衛『耳袋』巻四に見える「怪病の事」である。

清水家の家老を勤めし永井主膳正は、大久保内膳など近親なりしが、同人妹にて、御奉公などして主膳正方に寄宿してありしが、或日急病の由知らせきたるゆえ、早速まかり越しけるに、ほかに仔細なし。病氣はさして熱強きといえるにもなければども、夜具衣類そのほか座敷のあたり水だらけにて、いかさま井戸へ落ちしや又は池などへはまりしようなる事ゆえ、当人へ承りしに、一向前後覚えざる由なり。傍廻り家内の者へも聞きしが、「一向、井戸はもちろん池などへ入りし事もなし」といししが、今に不審晴れずと語りしなり。

猫の話ではないが、奉公人が水に入ったわけでもなくずぶ濡れとなったという。いかにも不思議な話である。番町には、前掲の鳥居丹波守の上屋敷もあり、このような怪しげな話が数多く残る地域であった。化猫に着意すれば、同じ『耳袋』巻二に「猫の人に化けし事」という話が見える。

鄙賤の話に、妖猫古くなりて老姥などをくらい殺し、己れ老姥となりて居る事あり。昔老母を持ちたる者、その母、猫にてありしゆえ、はなはだ酷虐にて人をいためし事多けれど、その子の身にとりてすべきやうなくうち過ぎしが、或時猫の姿をあらわし、全く妖怪に相違なし。しかれば、我が母をくいし妖猫とて切殺しける。母の姿となりしゆえに大きに驚き、全く猫にまざれなきゆえ殺しぬるに、母の姿となりし、是非もなき次第なり。いわれざる事して天地のいれざる大罪を犯しぬる」とて懇

意の者を招きて、「切腹いたし候間、この訳見届けくれ候よう」申しける時、かの男申しけるは「死は安き事なれば、まず暫く待ち給え。猫狐のたぐい、いったん人に化して年久しければ、たとえその命を落しても暫くは形をあらわさぬものなり」とて、くれぐれ押留めけるゆえその意に任せぬるが、その夜に到りてだん／＼形をあらわし、母と見えしは恐ろしき古猫の死骸なりけるとぞ。性急に死せんには大死をなしんとなり。

波線を見ると、長年生きた猫は、老母を喰らつてその姿に化けるという設定は、一般によく信じられていたようだ。また、人に化けた猫は死んだ後もしばらくはその正体を顕さなかつたため、切腹の覚悟を決めたところを止められ、時間がたつて猫に戻つたので命拾いをしたとある。この設定は猫堂の話にもあり、①本で見てみると、猫が化けた側室やその侍女たちを斬り殺した後、侍女たちは「何れも猫の本牀」を顕わしたが、側室だけはそのままの姿であることに驚き、

…惣太倉之進は御部屋の死骸、常に替らぬに心をいためるに、家老用人立会、此事甚むつかしく御部屋さま間違なければ一大事なり。（中略）無念なからも蔵之進惣太既に切腹と見へし所に、此事を聞ひとしく明王院走り来り、兩人を押留め、まづ／＼はやまり給ふな。都而年（年）ふる曲者は三日三夜、其正牀を顕し見せずといふ事あり。然れば日なたへ出して日の光を請てよく／＼見るへしと有に依て、則死骸を日なた江かき出しければ、不思議や日輪の光りさすとひとしく、惣身より真黒なる毛ずく／＼と立出て…

と、退治した方が切腹に追い込まれそうなるのを引き留められ、

留めた明王院の知恵で猫の姿となり、命が助かるという同じ展開が載る。このような話が、配合され使用されたことは明らかであろう。作者像としては、江戸在住で天明から寛政頃の種々の怪説を聞き得ることができそうな人物だった可能性が考えられるだろう。

このように、初期の形は、一つの出来事をそのまま描いたわけではなく、核になる話にいろいろな素材を肉付けして作られたことがわかる。そして、その核になったのは、高山彦九郎が聞いた話と同じようなものだった可能性が高い。肉付けする中で、佐賀藩の怪異を取り入れ、そして、舞台も番町ではなく大名家にした方が読者の興味をひき、武勇も強調できると考えたのかもしれない。本来、自藩の話ではないことを知っていて、武士としての誉れも書いてあり、写本で広まる分には、佐賀藩も目くじらを立てることはなかったであろう。事実、『三尾』が残り、②本は、佐賀の人物が書写して、熊本宇土藩の蔵書として残っている。④本の書写者は、福岡周船寺の酒屋の次男であり、周辺まで広まっていたこともわかる。⑤本は、紀州徳川家の旧蔵になることは言うまでもないのである。

おわりに

さて、ここまで初期の形について、中核となった話を指摘し、その創作について私見を述べた。最後に、この猫堂の初期形の話が長編化するにあたり、龍造寺が登場するか否かに関わらず、新たな素材が加えられることになる。それは、囲碁の勝負・盲目・殺人という要素になろう。架蔵本『佐賀旧猫伝』（大本四巻四冊、明治四年写）は、『今古実録佐賀怪猫伝』（栄泉社・明治十六年）とはば同じ

内容を持つが、龍造寺の登場しない話型となる。森半左衛門は小森半太夫と名前が変わり、側室お政の方に気に入られようと囲碁を習う。やがてお政の方の囲碁師南役榎本金扇と小森が手合わせをする中で、怪猫が暗躍し、榎本は自ら盲目となり、怪猫に殺され、崇る側に加わる。もう一方の話は、鍋島の太守が、龍造寺の子孫又七郎（盲人・囲碁に長じる人物を囲碁の最中に、ささいなことで手討ちにする。又七郎の老母は狂気し、その恨みを猫が引き継ぐというも^⑧）。いずれも似た要素が加えられる。これが、具体的に何によるかはまだ見つけていない。演劇か説話か、はたまた他の実録ものなのか。それによつては、新たな作品展開の意図や御家騒動との繋がりについて知ることができるかもしれないだろう。

注

- (1) 早川由美「鍋島猫騒動の変遷——実録・譚談と『花嫁蔵猫魔稿』——」
《名古屋大学国語国文学》86・平成12年。
- (2) 高野信治「鍋島猫騒動 御家騒動の物語化と怪異性」《新選 御家騒動》下所収、新人物往来社・二〇〇七年。
- (3) 近世実録全書第二巻緒言（早稲田大学出版部・大正六年）
- (4) 土井順一「佐賀鍋島化猫騒動について」《佐賀の文学》（新郷土刊行協会・昭和62年）
- (5) 上原虎重「佐賀の夜核怪猫伝とその渡英」《猫の歴史》《創元社・一九五四年、所収、後に東雅夫編『猫のまぼろし、猫のまどわし』（東京創元社・二〇一八年）に採録）に、佐賀藩の怪異として、早くに『翁草』の記事との関連を指摘する。

(6) 『日本随筆大成』第三期23・吉川弘文館・昭和53年

(7) 田中道雄責任編集『佐賀県近世史料』第九編第一卷（佐賀県立図書館・平成16年）所収。

(8) 菊池庸介『近世実録の研究』（汲古書院・二〇〇八年）

(9) 例えば、猫に襲われる直前、藩主が和歌を案じる場面で、諸本は「机」の字になっている箇所が、①本は「柅」か「框」の崩した文字に近い形になっている。

(10) 注(5)に同じ。『兔園小説』は日本随筆大成二期一卷（日本随筆大成刊行会・昭和三年）所収。早川・高野の論文にも、直接の関連とは別に、当時の化猫や御家騒動に関する演劇・説話・小説などの紹介は載る。

(11) 『高山彦九郎全集』第二卷（高山彦九郎遺稿刊行会・昭和27年）

(12) 鈴木棠三編注、東洋文庫207『耳袋』1（平凡社・一九七二年）

(13) 『太宰府市史 民俗資料編』（太宰府市・平成五年）に「富永徳助嘉永三年日記」が所収。

(14) 草双紙『鍋島猫騒動』（明治22年・豊栄堂）や『佐賀怪猫伝』（明治25年・荒川藤兵衛）など。

付記 本稿は、九州近世文学研究会（令和五年五月二十日）で口頭発表した内容に手を加えたものである。発表に際し、出席者の方々に多くのご指摘を頂戴した。御礼申し上げます。また、本稿を成すにあたり、貴重な蔵書の閲覧・撮影を許可された所蔵機関に厚く御礼申し上げます。